

小中の英語授業好感の変化及びその原因に関する予備調査

及川賢 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード: 英語、小中接続、好き・嫌い

1. はじめに

英語授業好感、すなわち英語の授業に対する好き・嫌いという気持ちは児童生徒の英語学習状況を理解する上で重要な要因の一つである。この「好き」と「嫌い」の割合は、小学校よりも中学校のほうが「嫌い」、あるいはそれに相当する回答の割合が高い傾向にある。例えば、文部科学省（2023）では「英語の授業は好きですか」という質問に対し、「どちらかといえば、当てはまらない」または「当てはまらない」の否定的な回答が、小学校では31.5%、中学校では47.5%となっている（いずれも令和5年度の数字）。Benesse 教育開発センター（2012）や文部科学省（2015）も同様に小学校よりも中学校のデータのほうが否定的な回答が多いことを示している。しかし、及川（2017）が指摘するように、これらは大括りの傾向を示すのみで、変化の詳しい実態を表しているとは言い難い。英語が好きという児童生徒が減少するという全体的な傾向はわかるが、中には英語がずっと好きだった児童生徒、ずっと嫌いだった児童生徒、小学校時には英語が好きだったが中学校で嫌いになった児童生徒、さらには、その逆に、小学校時は英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった児童生徒がいるはずである。この実態を正確に捉え、また、その好き・嫌いの理由を明らかにすることが重要である。

この点を踏まえ、及川（2017）は、児童生徒が小学校から中学校へ進む過程で英語への好き・嫌いがどのように変化したのか、さらにその変化の原因としてどのような要因があるのかを調査した。その結果、回答者（中学2年生）の中に小学校時に英語が好きだったが中学校時に嫌いになった生徒は一定数存在するが、逆に、小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになったという生徒もおり、その割合は後者の方が高かった。また、英語が嫌いになった原因も好きになった原因も、いずれにおいても、英語に対する得意・不得意の意識が影響していることが明らかになった。

この調査から7年が経過した。その間、小学校、中学校それぞれの段階で英語教育に大きな変化があった。2020年4月に小学校で、翌年の2021年4月に中学校それぞれで新学習指導要領が全面実施となり、小学校では英語の学習開始学年が3年生となり、また、5、6年生は「外国語」が「教科」となり、それまでの慣れ親しむことが目的であった英語学習が定着を目指すものに変わった。これらの要因が小学生や中学生の英語好感に影響を与えた可能性があるため、及川（2017）と同じ質問紙を用いて再び調査をすることとした。なお、本調査はその予備調査であり、参加者を絞って回答傾向などを確認し、今後の大規模調査へつなげる足掛かりとすることを目的としている。なお、科目としての正式名称は「外国語活動」及び「外国語」だが、本稿では特に断りがない限り「英語」を使用する。

2. 文献概観

英語の好き・嫌いに関する調査の概要は及川（2017）で簡潔にまとめているので、本稿ではそれらをさらにコンパクトのまとめ、その後、本調査の元となっている及川（2017）の概要を報告する。

英語の好き・嫌いに関する調査は大規模調査の一環として行われることが多く、そのいずれもが小学生よりも中学生のほうが英語に対して否定的な印象を持っていると報告している。前述の Benesse 教育開発センター (2012) では、22,202 組の中学生及びその母親に尋ねた質問紙において、小学校時に英語が好きだったと回答した回答者は 62.9%で、中学校時に英語が好きだったと回答した回答者は 57.1%だった。文部科学省 (2015) では、「あなたは英語が好きですか」という質問に対し、小学生は 70.9%、中 1 生は 61.1%、中 2 生は 50.3%が肯定的な回答をしている (回答者の合計は 46,407 人)。これらは各学校種や学年の回答者が異なるため、好き・嫌いの変化を直接反映したものではないが、回答者数の多さなどを考えれば、その傾向を十分に表すものと考えてよいだろう。

英語の好き・嫌いの変化をより詳しく記述した調査も存在する。國友 (2012)、井田 (2015)、猪井 (2015)、及川 (2016) はいずれも、「小学校時に英語が好きだったが中学校で嫌いになった生徒」と「小学校時に英語が嫌いだったが中学校で好きになった生徒」が存在していること、その数は前者より後者のほうが多い場合もあることをデータで示した。また、このすべての調査が、英語の好き・嫌いの変化の理由として、英語力に関する要因が関連している可能性があることを示している。

これらを受けて、及川 (2017) は小学校時と中学校時の英語の好き・嫌い及びその原因に関する調査を行った。1,374 名の中学校 2 年生に質問紙調査を実施し、まず、小学校 6 年生時と中学校 1 年生時それぞれで英語が好きだったかどうかを 4 件法で尋ねた。その結果、小学校時も中学校時も英語が好きだったという回答が 54.2%、小学校時は好きで中学校時は嫌いだったという回答が 12.1%、小学校時は嫌いで中学校時は好きだったという回答が 19.3%、小学校時も中学校時も嫌いだったという回答が 14.4%で、「小学校時は好きで中学校時は嫌い」という生徒と「小学校時は嫌いで中学校時は好き」という生徒の両方が存在すること及び後者が前者を上回ったことを報告した。さらに、変化の原因について、「文法」「語彙」「発音」「話すこと」「書くこと」「将来役立つ」「英語圏への興味関心」など 22 項目を挙げ、それらが変化の原因として当てはまるかどうかを 5 件法で回答してもらった。英語が嫌いになった理由の上位には、語彙、文法、書くこと、読むこと、会話、成績などが挙げられた。一方、英語が好きになった理由の上位には、将来役立つ、書くこと、ゲーム、歌、授業が簡単、などの項目が挙げられた。さらに、22 の要因をわかりやすくまとめるために、因子分析を用いて各項目の背後にある共通因子を探ったところ以下の 4 つの因子が抽出された。

第 1 因子「英語力・学習因子」(書く、語彙、文字、文法、読む、成績、英語そのもの)

第 2 因子「英語力・音声因子」(話す、発音、音読、聞く、会話)

第 3 因子「英語有用性因子」(英語圏への興味、旅行や留学への希望、仕事での有用性、将来の有用性)

第 4 因子「英語活動因子」(ゲーム、歌、ALT)

さらに、これらの 4 つの因子のうち英語の好き・嫌いの変化に影響を与えたかどうかを因子得点を用いて調査した。一元配置の分散分析で有意差の有無を確認したところ、第 1 因子「英語力・学習因子」と第 2 因子「英語力・音声因子」に有意差が生じた。いずれも英語力に関わる因子であったことから、英語の好き・嫌いには英語力に関わっている可能性が大きいと結論づけた。

この調査はもともと「小学校では英語が好きだったのに中学校では文法が中心で歌やゲームが少なく英語が嫌いになる生徒が多い」(及川、2015) という言説の真偽を確かめることを目的としていたが、小学校から中学校へ進む中で英語への好感が「好き→嫌い」の一方方向ではなく「嫌い→好き」もあること、それらの変化の原因は英語力に関するものであり、歌やゲームに関連する因子は影響を及ぼしていないことを明らかにした。

3. 調査

3-1 目的

本研究の目的は、小学校から中学校へ進んだ生徒の英語授業に対する好き・嫌いの変化とその原因を質問紙を通じて明らかにすることである。具体的には以下の2つのリサーチ・クエスチョン（RQ）に答えることである。

RQ-1：小学校6年時に英語授業が好きだったが中学校1年時に英語授業が嫌いになった生徒と小学校6年時に英語授業が嫌いだったが中学校1年時に英語授業が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化の原因は何であると参加者は捉えているか。

本研究は及川（2017）の再調査である。この調査から7年を経ているわけだが、この間日本の小学校における英語教育には大きな変化があった。2020（令和2）年4月から全面実施となった学習指導要領に基づき、小学校の英語では以下の変化があった。前学習指導要領下では、対象学年が5、6年生のみで、学ぶ目標も「慣れ親しみ」であり、学んだことの定着を目指すものではなかった。この時の科目名は「外国語活動」である。しかし、新しい指導要領下では、この「外国語活動」が3、4年生が学ぶ科目になり、5、6年生は学んだ内容の定着を目指す「外国語」を学ぶことになった。外国語活動の開始学年が5年生から3年生になったこと（「低学年化」）と5、6年生の「外国語」が教科になったこと（「教科化」）の2つが大きな変化である。低学年化により、それまで小学校での外国語活動の対象が全学年の3分の1だったのが、3分の2に倍増したことになる。「教科化」については、その定義が定まっていないが、先述の「定着」が一つのキーワードであろう。「外国語活動」では慣れ親しみが重視され、児童が英語を実際に試してみることが重視されてはいるが、その知識を身に付けること、すなわち「定着」を目指すものではないことを鑑みると、「定着」が「教科化」における重要な概念の一つであることは明らかである。

これらの変化にともない、英語の好き・嫌いにも変化が生じている可能性は十分に考えられる。そこで、本稿では及川（2017）で使用したアンケートを使用し、何らかの変化があるかどうかを調査する。

3-2 参加者

埼玉大学教育学部附属中学校の2年生134名に質問紙を配布し、回答してもらった。回収率は100%だが、指定したページとは異なるページに回答していた生徒やすべての項目で同じ番号の選択肢を回答するなど、回答傾向に疑義があると思われるものは対象外としたため、最終的に分析対象となったのは127名分の回答である（有効回答率：94.8%）。参加者は県内各地から集まっているため、小学校時に受けていた英語の授業は様々だが、学習指導要領に従って授業が実施されていたとすれば、小学校3、4年生時に「外国語活動」を、5、6年生時に「外国語」を履修しているはずである。基本的には、3、4年生が年間35時間（45分授業なら週当たり1コマ相当）、5、6年生が年間70時間（45分授業なら週当たり2コマ相当）を提供しているが、それ以上を提供し

ている自治体もある。彼等は現行の学習指導要領が全面実施となった2020年4月に小学校5年生になっているため、5、6年時に教科としての「外国語」の授業を受けている。また、3、4年時は移行期間として「外国語活動」の授業を年間15時間ずつ受けている。また、5年生より検定教科書が使用されている（それまでは、「外国語活動」は教科ではなく、また、移行期間の5、6年生時は文部科学省が作成した *We Can!* という教材を使用していた自治体が多い）。及川（2017）と同様に小学校での英語の好き・嫌いは6年生時の印象を、中学校時の好き・嫌いは1年生時の印象を尋ねているが、小学校6年生時の英語の位置づけが前回の調査と今回で異なっている。すなわち、前回調査時に英語（「外国語活動」）は必修ではあったものの教科ではなかったが、今回の調査に参加した中学生が小学校で英語（「外国語」）の授業を受けた時点で教科となっていた。また、旧指導要領下では外国語活動の標準授業時数は年間35時間だったが、現指導要領下では年間70時間となっている。

3-3 調査用質問紙

本調査は及川（2017）の追試であるため、同じ質問紙を用いた。まず、第1ページで小学校6年時及び中学校1年時それぞれの段階での英語授業に対する好き・嫌いを4件法（「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」）で尋ねた。続いて、参加者には、その結果をもとに、自分が以下のいずれに属するかを回答してもらった。

小学校時	→	中学校時
好き	→	好き
好き	→	どちらかといえば好き
好き	→	どちらかといえば嫌い
好き	→	嫌い
どちらかといえば好き	→	好き
どちらかといえば好き	→	どちらかといえば好き
どちらかといえば好き	→	どちらかといえば嫌い
どちらかといえば好き	→	嫌い
どちらかといえば嫌い	→	好き
どちらかといえば嫌い	→	どちらかといえば好き
どちらかといえば嫌い	→	どちらかといえば嫌い
どちらかといえば嫌い	→	嫌い
嫌い	→	好き
嫌い	→	どちらかといえば好き
嫌い	→	どちらかといえば嫌い
嫌い	→	嫌い

この結果を受けて、「好き」及び「どちらかといえば好き」は肯定的回答として「好き」に、「嫌い」及び「どちらかといえば嫌い」は否定的回答として「嫌い」に分類して、以下の4つに集約した。

- 1) 小学校時に英語が「好き」で中学校時も英語が「好き」【好き→好き】
- 2) 小学校時に英語が「好き」で中学校時は英語が「嫌い」【好き→嫌い】
- 3) 小学校時に英語が「嫌い」で中学校時は英語が「好き」【嫌い→好き】
- 4) 小学校時に英語が「嫌い」で中学校時も英語が「嫌い」【嫌い→嫌い】

そして、それぞれの変化の理由を尋ねるページに進んでもらったが、中学時の英語授業に対する好き・嫌いが肯定的であった1)と3)が同じ質問内容に、否定的な2)と4)が同じ質問内容になっている。例えば、小学校時に英語が「嫌い」で中学校時は英語が「好き」だった回答者(=上記の3)のタイプ)への質問例は以下の通りである。

あなたが小6では英語が嫌い(あるいは「どちらかといえば嫌い」)だったが中1で英語が好き(あるいは「どちらかといえば好き」)になった理由は何だと思いますか?以下の01~22のそれぞれが、理由として当てはまるか、当てはまらないかを、例にならい、回答してください。

(例) 01. 中1の時、英単語や英熟語を覚えることが得意だったから。

選択肢⇒当てはまる—どちらかといえば当てはまる—どちらとも言えない—どちらかといえば当てはまらない—当てはまらない

参加者には上のように示された文言の内容が自分に当てはまるか否かを5件法で回答してもらった。項目は以下の22個で、「英語力に関する項目」「英語授業に関する項目」「英語の有用性や英語・英語文化圏に関する項目」のいずれかに分類される(各文言の前の数字は項目番号で、【 】内は本稿内での略称)。理由の判断の時期を「中1」に限定したのは、英語授業に対する好き・嫌いが変化した時期に起こったことのみ要因を絞るためである。

(中学校時に英語が好きだったという回答者(=1)及び3)向けの質問)

○ 英語力に関わる項目

01. 中1の時、英単語や英熟語を覚えることが得意だったから。【語彙】
02. 中1の時、英語を発音することが得意だったから。【発音】
03. 中1の時、英語の文字を覚えることが得意だったから。【文字】
04. 中1の時、はじめて見る英単語でも、読み方がわかったから。【Phonics】
05. 中1の時、英語の文法が得意だったから。【文法】
06. 中1の時、英語を聞くことが得意だったから。【聞く】
07. 中1の時、英語を話すことが得意だったから。【話す】
08. 中1の時、英語を音読することが得意だったから。【音読】
09. 中1の時、英語を読むことが得意だったから(音読ではなく文章の意味を理解すること)。【読む】
10. 中1の時、英語を書くことが得意だったから。【書く】
11. 中1の時、先生や友達と英語で会話をすることが得意だったから。【会話】
13. 中1の時はテストなどがあり、成績がつくことが好きだったから。【成績】

○ 英語授業に関する項目

12. 中1の英語の授業が簡単だったから。【授業簡単】

14. 中1の時、英語の授業で英語の歌を歌うことが好きだったから。【歌】
15. 中1の時、英語の授業でゲームやコミュニケーション活動をすることが好きだったから。
【ゲーム】
16. 中1の時、ALTのいる授業が好きだったから。【ALT】
22. 中1の時に使った英語の教科書が役に立ったから。【教科書】
- 英語の有用性や英語・英語文化圏に関する項目
17. 中1の時、英語を学ぶと将来役立つと思ったから。【将来】
18. 中1の時、英語そのものが好きだったから。【英語そのもの】
19. 中1の時、将来英語を使って仕事をしたいと思ったから。【仕事】
20. 中1の時、アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの英語圏に興味関心を持ったから。【英語圏】
21. 中1の時、将来アメリカ、オーストラリア、イギリスなど英語を使える国に旅行や留学をしたいと思ったから。【旅行留学】

一方、中学校時の英語授業に対する好き・嫌いが否定的であった2)及び4)のタイプは各項目の表現が否定的になっている。例えば、01は「中1の時、英単語や英熟語を覚えることが得意ではなかったから。」となった。参加者はすべての項目に5件法で回答した。全ての項目の回答に要した時間は10～15分程度であった。

3-4 データ処理

回収された質問紙の結果はSPSS (Ver. 23) を用いて分析した。英語授業に対する好き・嫌いの変化(RQ-1)は記述統計で表し、変化の理由(RQ-2)は探索的因子分析を用いて因子を推定し、その後、RQ-1の4つのグループ間で統計的な有意差があるか否かを一元配置の分散分析で検証した。

4. 結果と考察

参加者の小6及び中1時点での英語授業の好き・嫌いの割合を以下に示す。

小学校6年時	好き……………	34人 (26.8%)
	どちらかといえば好き…	40人 (31.5%)
	どちらかといえば嫌い…	37人 (29.1%)
	嫌い……………	16人 (12.6%)
中学校1年時	好き……………	65人 (51.2%)
	どちらかといえば好き…	41人 (32.3%)
	どちらかといえば嫌い…	14人 (11.0%)
	嫌い……………	7人 (5.5%)

小学校時も中学校時も「好き」「どちらかといえば好き」に当たる肯定的回答の割合のほうが

「嫌い」「どちらかといえば嫌い」に当たる否定的回答よりも多いことがわかる。特に中学校時の回答では「好き」が半数を超えており、「どちらかといえば好き」と併せた肯定的回答が83.5%に上っている。どちらも肯定的回答が多いという点は及川（2017）と同様である。

そして、この結果もとに、小6から中1の間で英語が「好き」から「嫌い」に変化した生徒及び「嫌い」から「好き」に変化した生徒の割合を算出したところ、「好き→好き」が52.0%、「好き→嫌い」が6.3%、「嫌い→好き」が32.3%、「嫌い→嫌い」が9.4%であった。全体的な傾向は及川（2017）と変わらない。

「好き→好き」66人（52.0%）

「好き→嫌い」8人（6.3%）

「嫌い→好き」41人（32.3%）

「嫌い→嫌い」12人（9.4%）

よって本調査において「小学校時に英語が『好き』で中学校時は英語が『嫌い』になった生徒の割合は6.3%（8人）で、小学校時に英語が『嫌い』で中学校時は英語が『好き』になった生徒の割合は32.2%（41人）である」がRQ-1への回答となる。

続いて、RQ-2「RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化の原因は何であると参加者は捉えているか」の回答を導くため、22の質問紙項目のデータを分析した。「好き→嫌い」グループにおける各項目の値（表1＝英語が嫌いになった理由）及び「嫌い→好き」グループにおける各項目の値（表2＝英語が好きになった理由）は下記の通りである（平均値の高い順）。「好き→嫌い」の理由には「語彙」「文法」「書く」「読む」などの英語力に関わるものが多く、「嫌い→好き」では「書く」「読む」「聞く」などの英語力に関わるもののほかに「将来」「ゲーム」「歌」など有用性や英語授業に関わるものも目立つ。

英語を嫌いになった理由の上位を見ると、「文法」や「語彙」など「勉強」をイメージさせる項目や「成績」のように自分の英語力がはっきり示されてしまう項目が目立つ。この傾向は及川（2017）とほぼ同じである。一方で英語を好きになった理由の上位は「歌」「ゲーム」など一般に楽しいと思われる項目や「将来」のように将来の有用性への意識が英語好きに転じさせている点も特徴的である。これらの傾向も及川（2017）と類似している。

表1 英語が嫌いになった理由

文法	3.88(1.13)
成績	3.75(1.39)
語彙	3.63(1.06)
書く	3.50(1.31)
会話	3.38(1.41)
話す	3.13(1.46)
発音	2.88(1.56)
文字	2.75(1.58)
授業難しい	2.75(1.04)
英語そのもの	2.63(1.41)
ゲーム	2.50(1.51)
Phonics	2.38(1.06)
読む	2.25(1.16)
音読	2.13(1.36)
旅行留学	1.88(1.46)
ALT	1.75(1.04)
英語圏	1.75(1.04)
将来	1.63(1.19)
聞く	1.63(0.92)
仕事	1.63(0.92)
教科書	1.50(0.93)
歌	1.00(0.00)

表2 英語が好きになった理由

歌	4.15(1.13)
将来	4.10(1.07)
ゲーム	3.63(1.24)
読む	3.46(1.31)
聞く	3.32(1.33)
書く	3.22(1.31)
Phonics	3.20(1.29)
音読	3.17(1.22)
文法	3.12(1.31)
文字	3.07(1.39)
英語そのもの	3.07(1.37)
旅行留学	3.05(1.59)
英語圏	3.05(1.45)
授業簡単	2.98(1.41)
教科書	2.98(1.31)
ALT	2.98(1.21)
成績	2.93(1.54)
語彙	2.88(1.19)
発音	2.80(1.17)
話す	2.76(1.16)
仕事	2.71(1.33)
会話	2.41(1.14)

*カッコ内は標準偏差

さらに、全体的な傾向を捉えるため、因子分析を用いて項目の背後にある共通因子を探り、より汎用性の高い要因を探ることとした。因子分析はすべてのグループを対象に行ったが、「好き→嫌い」グループと「嫌い→嫌い」グループの回答は数字が大きいほうが否定的回答になるので、「好き→好き」及び「嫌い→好き」グループの基準に合わせるために「1」を「5」に、「2」を「4」という具体的に回答を反転させたのちに実施した。正確に言えば、「得意ではなかった」を反転させても「得意だった」にはならないので、完全な対応にはならないが、各項目に対する印象がプラスかマイナスかという大枠で捉え、おおよその傾向を知るにはこの方法で問題ないと判断した。

まず、固有値1以上を基準として、最尤法で初期解を求めたところ、8回の反復で4因子が抽出された。続いて、因子数を4に固定し、最尤法、プロマックス回転で分析を続行したが、「会話」「成績」「授業簡単」の3項目の因子負荷量が0.4に満たなかった。そこで、この3項目を除外し、再度最尤法及びプロマックス回転を行った結果、7回の回転で反復が収束し、4因子が抽出された。しかし、「将来」の項目の因子負荷量が0.4に満たなかったため、この項目を除外し、再度最尤法及びプロマックス回転を行った結果、6回の回転で反復が収束し、4因子が抽出された。固有値の減衰状況と解釈可能性からこの4因子解を採用した ($\chi^2=166.35$ 、 $p<.000$ 、 $df=8$ 、表3)。

表3 英語授業好感の変化の理由の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

項目番号	項目内容	因子			
		I	II	III	IV
因子I 英語力・音声因子					
08.	音読	.953	-.141	.047	-.015
06.	聞く	.662	.036	-.075	.117
04.	Phonics	.599	.116	.107	-.168
07.	話す	.587	.217	-.055	.211
02.	発音	.562	.153	-.003	.178
09.	読む	.489	.411	.004	-.113
因子II 英語力・文字因子					
10.	書く	.092	.741	-.048	.003
01.	語彙	.025	.716	.011	-.154
05.	文法	.125	.655	-.053	-.068
18.	英語そのもの	-.252	.673	.074	.388
03.	文字	.233	.567	.049	-.129
因子III 英語有用性因子					
20.	英語圏	-.139	.016	.872	.075
21.	旅行留学	.018	.075	.737	-.074
19.	仕事	.217	-.120	.628	-.003
因子IV 英語活動因子					
16.	ALT	.225	-.118	.040	.699
14.	歌	-.030	-.025	-.133	.607
22.	教科書	.032	-.183	.083	.483
15.	ゲーム	-.043	.155	.067	.403
因子間相関		I	II	III	IV
		I	—	.618	.278
		II		—	.257
		III			—
		IV			

因子Iは「音読」「聞く」「Phonics」「話す」「発音」「読む」に影響を与える因子である。いずれも英語力に直接かわる項目だが、音声に関連するものが多い。「読む」は一見すると音声とは無関係のように見えるが、音読との関わりも大きく、また小学校や中学校1年時では音声とのかかわりも大きいと考えられる。よって、「英語力・音声因子」と命名した。これは及川（2017）でも抽出された因子で、そこでは「話す」「発音」「音読」「聞く」「会話」が大きく関わっていた。因子IIは「書く」「語彙」「文法」「英語そのもの」「文字」に影響を与える因子である。「授業そのもの」以外は英語力に直接関連する項目であり、その点は因子Iと同様であるが、こちらは音声よりも「文字」との関連が強いと言える。そこで、「英語力・文字因子」と命名した。「英語そのもの」の位置づけが難しいが項目数から判断した。なお、及川（2017）で抽出された因子に「英語力・学習因子」があり、その関連項目は「書く」「語彙」「文字」「文法」「読む」「成績」

「英語そのもの」で、今回の「英語力・文字因子」と共通点が非常に多い。前回「文字」ではなく「学習」としたのは、「成績」と「英語そのもの」という2つの項目が入っていたことから、他の項目も机に向かつて勉強している場面が想像され、この名前とした。今回は「成績」がないため、「文字」の要因の方が強いと判断し、また、前述の「音声因子」との区別が明確になることから、この名前とした。因子Ⅲは「英語圏」「旅行留学」「仕事」に影響を与えている。英語そのものではなく、英語を使うことで英語圏の文化に触れたり、旅行、留学、仕事へつながることから、「英語有用性因子」と命名した。これも及川（2017）で抽出された因子で、その際は「英語圏」「旅行留学」「仕事」「将来」が関連項目であった。因子Ⅳは「ALT」「歌」「教科書」「ゲーム」に影響を与える。英語の授業、特に英語を使った活動をしている場面が容易に想像されるため、「英語活動因子」と命名した。これも及川（2017）でも抽出されている因子で、その際は「ゲーム」「歌」「ALT」が関連していた。

因子分析の結果、英語に対する好き・嫌いは4つの因子で構成されていることが推定された。これらは基本的に及川（2017）と同じ因子であることから、生徒の好き・嫌いに影響を与える可能性が高いと思われる。今後のさらなる検証が期待される。

さらに、中学校で英語が嫌いになる際に影響が大きい要因を特定するには、「好き→好き」（小学校時も中学校時も英語が好き）のグループと「好き→嫌い」（小学校時は英語が好きだったが中学校時は嫌い）の2つのグループを比較する必要がある。どちらのグループも小学校時は英語が好きだったが、中学校時で好き・嫌いが分かれたので、この2つを比較することで変化の原因に関わる要因が明らかになるかもしれない。及川（2017）は、英語力に関わる2つの因子（「英語力・学習因子」「英語力・音声因子」）で「好き→好き」グループの方が「好き→嫌い」グループより有意に高い値を示したので、英語力が英語が嫌いになる要因であることを指摘した。同様に、英語が好きになった原因を探るため、「嫌い→好き」と「嫌い→嫌い」を比較する必要がある。及川（2017）でも同じ比較をしており、その結果、英語力に関わる2つの因子（「英語力・学習因子」「英語力・音声因子」）で「嫌い→好き」グループの方が「嫌い→嫌い」グループより有意に高い値を示したので、英語が好きになる要因も英語力であると結論づけている。

上記の検証のため、各因子の因子得点の平均を一元配置の分散分析で検証したところ、有意差が確認されたため、多重比較（Bonferoni）を行い、以下の結果が得られた（記述データは表4を参照）。

因子Ⅰ（英語力・音声因子）：有意差なし

因子Ⅱ（英語力・文字因子）：「好→好」と「嫌→好」が「嫌→嫌」よりも有意に高い

因子Ⅲ（英語有用性因子）：「好→嫌」が「嫌→好」より有意に高い

因子Ⅳ（英語活動因子）：「好→好」と「好→嫌」が「嫌→好」よりも有意に高い

表4 各グループの因子得点の平均及び標準偏差

	n	M (SD)			
		因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
好→好	63	0.22 (0.90)	0.32 (0.78)	0.06 (0.89)	0.19 (0.71)
好→嫌	8	0.24 (0.90)	-0.42 (0.89)	0.73 (0.72)	0.65 (0.69)
嫌→好	41	-0.24 (0.92)	-0.10 (0.89)	-0.23 (0.94)	-0.32 (0.91)
嫌→嫌	11	-0.53 (1.07)	-1.17 (0.86)	-0.04 (0.97)	-0.36 (1.17)

上記の結果を先ほどの比較に当てはめると、「好き→好き」と「好き→嫌い」グループを有意に分ける因

子は存在しなかった。一方、「嫌い→好き」と「嫌い→嫌い」を分ける因子は因子Ⅱ（英語力・文字因子）であった。この結果から、英語が嫌いだった生徒が好きになる要因として、文字に関連する活動が考えられる。例えば、小学校では音声を中心の活動が多いが、音声に苦手意識を感じていた生徒も文字の助けを得て、理解を深め、英語が好きになっていった可能性が考えられる。

上記の結果は及川（2017）と一部共通するものがある。すなわち、英語力が関わっているという点は同じだが、今回は文字に関する因子のみが関わっているという結果になった。しかも、文字を伴う活動や能力により英語が好きになった可能性があるため、さらなる調査が必要である。

5. まとめ

本調査は2つのリサーチクエスチョンに答えることを目的としていた。

RQ-1：小学校6年時に英語授業が好きだったが中学校1年時に英語授業が嫌いになった生徒と小学校6年時に英語授業が嫌いだったが中学校1年時に英語授業が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

このRQへの回答は以下の通りである。

「好き→好き」 66人（52.0%）

「好き→嫌い」 8人（6.3%）

「嫌い→好き」 41人（32.3%）

「嫌い→嫌い」 12人（9.4%）

全体的な傾向は及川（2017）とほぼ同じと考えてよいだろう。ただ、中学1年時に英語が好きだったという回答の割合が多かった点が特徴の一つであろう。これは、参加者の所属する学校が1か所であり、また、学年を担当する英語教員も1名である点が影響しているかもしれない。今後は調査の範囲を広げる必要がある。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化の原因は何であると参加者は捉えているか。

因子分析により抽出された4つの因子が変化に関わっていると考えられる。その因子とは「英語力・音声因子」「英語力・文字因子」「英語有用性因子」「英語活動因子」の4つである。このうち、好き・嫌いの変化に直接かかわる因子が「英語力・文字因子」であった。及川（2017）では「英語力・学習因子」「英語力・音声因子」が好き・嫌いの変化に強く関わっていたが、今回の結果は、英語が嫌いだった生徒が好きになった場合にのみ関わっていた。この違いの原因についても今後明らかにしていく必要がある。

引用文献

井田真由美. (2015). 『コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動の研究～小中連携の視点から、こ

- れからの教員研修のあり方を考える～』（平成26年度埼玉県長期研修教員研究報告書）。
- 猪井新一. (2015). 「小学校英語に対する学習者の態度は中学校で変化するのか」『茨城大学教育学部紀要 教育科学』64, 135-149.
- 及川賢. (2015). 「英語学習への意識の変化に関わる要因—小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いとの関係—」『埼玉大学紀要 教育学部』64-2, 199-212.
- 及川賢. (2016). 「小学校時及び中学校時の英語学習に対する意識の変化とその関連要因」『埼玉大学紀要 教育学部』65-1, 145-165.
- 及川賢. (2017). 「小中における英語授業好感の変化に影響を及ぼす要因」*KATE Journal vol. 31*. 71-84. 東京：関東甲信越英語教育学会.
- 國友達朗. (2012). 「小学校『外国語活動』・中学校『英語』嫌いの原因を探る」（埼玉大学教育学部提出の卒業論文）。
- Benesse 教育開発センター. (2012). 『小・中学校の英語教育に関する調査～中学1年生の目から見た英語教育とは？～速報版』東京：ベネッセコーポレーション. <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3178>. (2023年9月30日現在).
- 文部科学省. (2015). 「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169_02.pdf. (2023年9月30日現在).
- 文部科学省. (2023). 「令和5年度 全国学力・学習状況調査の結果」<https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary.pdf>. (2023年9月30日現在).

(2023年9月30日提出)
(2023年11月7日受理)